演習林（東大）, 54, 001-003 (2013)

東京大学演習林維管束植物目録

東京大学演習林基盤データ整備委員会生物部門植物分野

List of vascular plant of the University of Tokyo Forests

Plant Group, Biology Division, Fundamental Data Development Committee :
Creation and the utility of flora list in the University of Tokyo Forests

1. はじめに

東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林（以下，演習林）は，森林や施業に関する教育研究を行うことを目的として設置された。演習林は，1894年の千葉演習林の設置以来，100年以上の歴史を持ち，北海道演習林，秩父演習林，田無演習林，生態水文学研究所，富士癒しの森研究所，樹芸研究所の計7つの地方演習林からなる。総面積は32,300haにおよび，気候帯として亜寒帯から暖温帯を含むなど，多様な森林から構成されている。

演習林では，担うべき大学教育・研究・社会連携の中で，研究に関し，大学を中心とした研究組織に最適なフィールドおよび森林を中心とした自然環境の動態に関する記録を提供することをミッションのひとつとしており，具体的には，基盤データ整備委員会を常置委員会として2004年に設置し，基礎データの収集や提供について整備を進めている。

基盤データ整備委員会生物部門植物分野（以下，植物分野）は，演習林内に生育する維管束植物（自生種・導入植栽種）の目録作成と標本整備を目的に全体計画を策定し，2005年より活動を行っている。

本報告は，演習林内に生育する維管束植物（自生種・導入植栽種，温室植物）について，2005年から2011年（千葉演習林は2012年まで）にかけて調査を行い，その成果を各地方演習林の植物目録として体系的にまとめたものである。

2. 分類体系

植物分野では，2005年に植物目録を整備するための実施計画を策定し，平凡社から発行されている「日本の野生植物」[1-6] や「日本の帰化植物」[7] に準拠することとし，これに掲載のない外国産を含む植栽種などは，小学館の「園芸植物大事典」[8,9] を参照するとした。「日本の野生植物」や「園芸植物大辞典」の裸子植物の分類体系は新エングラー体系に従っており，被子植物では，花被がない単純な構造の花から全ての器官が揃った複雑な構造の花が進化したという仮説の下で分類されている[1-7]。また，「園芸植物大辞典」の被子植物は，クロンキスト体系になっており，単純な構造を出発点とするのではなく，多数の花被・雄しべ・雌しべ等が軸の周りを螺旋状に配列している両性花を出発点として，この原始的被子植物から種々の植物群が進化した，とする仮

説で分類されている[8,9]。一方，1990年代にDNA塩基配列を用いた分子系統学的解析が普及すると，被子植物の詳しい系統関係が発表されるようになり，従来の分類体系と整合性のない部分が明らかになった。そのため，分子系統樹に基づく新しい分類体系として，APG（Angiosperm Phylogeny Group）分類体系が1998年に発表された[10]。APG分類体系では，基本的に分子系統樹の単系統群について目や科を定義する。その後，従来の分類体系との整合性が再検討され（APGⅡ）[11]，2009年のAPGⅢの発表で分類体系が確立されつつある[12]。今後はAPG分類体系が主流となっていくことが想定されることから，採用する分類体系について再検討した結果，APG分類体系に従って分類群を配列することとした。ただし，実情を考慮し，新エングラー体系（科名）も併記する。

APG分類体系による分類群の配列や科名，学名については，「日本維管束植物目録」[13] によることを基本とし，これに記載のない分類群については，英国キュー王立植物園と米国ミズーリ植物園が編集している「The Plant List」[14] によった。和名表記については，「日本の野生植物」[1-6]，「日本の帰化植物」[7]，「園芸植物大事典」[8,9] を基本に従った。また，帰化種や固有種についても，「日本維管束植物目録」[13] に基づいて編集を行った。さらに，環境省及び各地方演習林が所在する都道府県から公表されている最新のレッドリストについても掲載した。

3. 担当者

植物分野における2005 ～ 2012年度までの担当者を表－1に示す。

謝　辞

本報告の作成にあたり，秩父演習林講師平尾聡秀氏には，最新の分類体系など，細部にわたりご助言を頂いた。ここに記して謝意を表します。

表－1. 植物分野担当者

		2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
部門責任者		石橋　整司	石橋　整司	鎌田　直人	鎌田　直人	鎌田　直人	鎌田　直人	鎌田　直人	鎌田　直人
分野責任者		五十嵐　勇治	五十嵐　勇治	五十嵐　勇治	五十嵐　勇治	五十嵐　勇治	五十嵐　勇治	五十嵐　勇治	五十嵐　勇治
千葉	草本	軽込　勉	軽込　勉	軽込　勉	藤平　晃司	藤平　晃司	藤平　晃司	藤平　晃司	藤平　晃司
	木本	藤平　晃司	藤平　晃司	藤平　晃司	軽込　勉	軽込　勉	軽込　勉	軽込　勉	軽込　勉
北海道	草本 木本	木村　徳志	木村　徳志	木村　徳志	木村　徳志	木村　徳志	木村　徳志 及川　希	木村　徳志 及川　希	木村　徳志 及川　希
秩父	草本 木本	五十嵐　勇治	五十嵐　勇治	吉田　弓子	吉田　弓子	吉田　弓子	五十嵐　勇治 吉田　弓子	五十嵐　勇治 吉田　弓子	五十嵐　勇治 吉田　弓子
生態水文	草本 木本	渡部　賢	渡部　賢	渡部　賢	渡部　賢	渡部　賢	渡部　賢	渡部　賢	渡部　賢
富士癒しの森	草本 木本	秩父演協力	秩父演協力	秩父演協力	秩父演協力	算用子　麻未	西山　教雄	西山　教雄	西山　教雄
樹芸	草本 木本	辻　和明	辻　和明	辻　和明	辻　和明	辻　和明	辻　和明	辻　和明	辻　和明
田無	草本 木本	坂上　大翼	坂上　大翼	坂上　大翼	坂上　大翼	坂上　大翼	楠本　大	楠本　大	栗田　直明

引用文献

1）岩槻邦男（1992）日本の野生植物　シダ．311pp.，平凡社，東京.

2）佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫編（1982）日本の野生植物　草本Ⅰ　単子葉類．305pp.，平凡社，東京.

3）佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫編（1982）日本の野生植物　草本Ⅱ　離弁花類．318pp.，平凡社，東京.

4）佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫編（1981）日本の野生植物　草本Ⅲ　合弁花類．259pp.，平凡社，東京.

5）佐竹義輔・原　寛・亘理俊次・富成忠夫編（1989）日本の野生植物　木本Ⅰ．321pp.，平凡社，東京.

6）佐竹義輔・原　寛・亘理俊次・富成忠夫編（1989）日本の野生植物　木本Ⅱ．305pp.，平凡社，東京.

7）清水建美（2003）日本の帰化植物．337pp.，平凡社，東京.

8）田中　修（1994）園芸植物大事典1＜コンパクト版＞．1524pp.，小学館，東京.

9）田中　修（1994）園芸植物大事典2＜コンパクト版＞．1575pp.，小学館，東京.

10）Angiosperm Phylogeny Group（1998）An ordinal classification for the families of flowering plants. Annals of the Missouri Botanical Garden 85:531-553.

11）Angiosperm Phylogeny Group（2003）An update of the Angiosperm Phylogeny Group classification for the orders and families of flowering plants: APG II. Botanical Journal of the Linnean Society 141:399-436.

12）Angiosperm Phylogeny Group（2009）An update of the Angiosperm Phylogeny Group classification for the orders and families of flowering plants: APG III. Botanical Journal of the Linnean Society 161:105-121.

13）米倉浩司（2012）日本維管束植物目録379pp.，北隆館，東京.

14）The Plant List（2010）Version 1. Published on the Internet, http://www.theplantlist.org/（2013年1月1日）.